

カリスマ的關係について

— 非対称的關係の転倒 —

水 垣 源太郎

0. 問題設定

ウェーバーによって社会学に導入されたカリスマ概念は、彼自身も述べているように、法学者ルドルフ・ゾームの教会法研究から借用されたものであるが¹⁾、新しい意味世界の創造に関わる人間の自由や主体性を理論化する際のキーワードとして用いられ、それこそ「カリスマ的」に社会学的思考へ浸透したばかりか、現在では、多くの人々を陶醉させる独特な魅力を指す形容詞として、一般に広く普及している。しかし、社会学におけるカリスマの定義は、カリスマをめぐる諸側面の“not-only-but-also constellation” (Lipp 1977: 61) に終始し、必ずしも明確なものではなかった。例えばベンディクスは、ウェーバーのカリスマ概念から日常化の部分を捨象した「カリスマ的指導」に限定して考察し、その属性を列挙している（「賜物」であること、革命性、経済的能率の無視、信者との共同体形成、信者による承認の必要）けれども、これらの諸属性の関係を論じてはいない (Bendix in: Glassman 1986: 19)。こうした事態の背景には、そもそもウェーバーにおけるカリスマ概念の指示対象が多岐にわたり、何を概念の本質とすべきかが分かりにくいという事情があったと思われる。カリスマ概念を宗教的カリスマに限定すべきだとの主張 (Friedrich 1961) や、応用可能性または概念そのものへの疑問視 (Wolpe 1968) などは、それに対する不満の表れとみてよいであろう。

しかしカリスマ的人物とその帰依者を含めたカリスマ的共同体にまで視野を広げて考えた場合、少なくとも次の二つの側面が問題とされてきたし、また問題としうる。一つは、カリスマ的共同体が、既成の社会規範を否定または破壊してしまう、対外的コンフリクトの側面であり、主にカリスマの「革命性」「秩序破壊的側面」として指摘されてきたものである。いま一つは、カリスマ的共同体内部における独特な秩序の形成という側面であり、これは、社会システムのコアをなす「中心的権威」の問題ととらえられてきた。しかしおそらく両者は、別の問題ではない。次のような問を立てるとき、この二つの側面をコインの両面とするようなカリスマ的共同体の關係構造を問うことができるからである。すなわち、社会統制の空白地点、すでにある共同体規範からして無根拠な地点に、いかにして新

たな共同体規範が成立するのか。

本稿は、この間のもとに、カリスマ的共同体を支える関係性を解読し、共同体論への新たな一視野を提供しうる独自の概念として再提出することを試みる。そのために次の二点を前提としたい。一つは、社会統制の及ばない情熱・情緒といった領域に基盤をもつ限りで、カリスマ的共同体を考えるということである。二つには、カリスマ的人物と帰依者とを実体的にとらえず、むしろ抽象的な役割概念としてとらえる。カリスマ的人物は、カリスマであることを離れて、自己のカリスマについて語ることができるし、帰依者もまたいわゆる行政幹部として、他の帰依者よりもカリスマ的な位置につくことができるからである。こうしたカリスマ的共同体を一つの関係構造に基づくものとしてとらえ、これをカリスマ的關係と呼ぶ。結論を先取りしていえば、カリスマ的關係とは、外部からはその存在基盤とみえる非対称的關係が、内部において転倒して表象され、共同体規範として成立している関係のことである。そしてカリスマ的關係の独自性は、それを成り立たせているメカニズムにある。

以下ではチャールズ・リンドホルム、大村英昭及びウェーバーの三人の論者を取り上げて考察するが、それらをあらかじめ要約しておくのとおりである。リンドホルムは、「カリスマ的帰依」の感情的意味とその文化的相対性に焦点を当てている。カリスマ的帰依とは、愛着／分離という人間の両義的欲望を表出する形式の一つであるが、それは、共同体規範の統制の外部に成立するという意味で反文化的である。リンドホルムが愛着＝合一化の側面を指摘するのに対して、大村は、分離の側面を強調する。大村は、Cの排除に関するAとBの合意と同時に、Cがカリスマとして析出し、カリスマ的共同体が成立することを示唆するが、そこでCの意味の豊かさが失われないことをも同時に指摘する。こうした非日常的合一化経験と、排除による共同体規範の成立との関連については、ウェーバーを参照する。彼は、非日常的なCとの出会いにおいて、先行的な規範的所与をみてしまうという転倒的经验が、合一化の正当的对象としてCを排除する共同体規範と結び付いていることを示唆している。

1. 文化的相対性

リンドホルムにとって、カリスマ的帰依とは、愛着／分離という人間の両義的欲望が社会統制から逃れたところで表出されるところの、反文化的形式の一つである。

現代には、この欲望を無害な形で拡散放出する様々な文化的・社会的統制装置が用意されている。例えば、公的領域では、自分の趣味への耽溺を誘う消費社会、国家への強い愛着、スターの偶像視、街頭やテレビの伝道師の説教などが、私的領域では、家庭、友情共

同体、ロマンティックな恋愛などが、そうした意味での機能的等価項となっているのである。リンドホルムは、この中で特に恋愛を取り上げ、カリスマ的帰依と対比させる。というのは、両者において経験される身体の直接性が、スポーツ・宗教・芸術・芸能・消費といった、公共空間での抽象的表出よりも、圧倒的に強烈だからだ。しかし両者は共に、自他の完全な同一化と無限の自己犠牲を要求する点で、互いに排他的であり、一人の人間の中で同時に存在することができない。両者の差は、文化的認知の問題である。恋愛は、閉じた二者相互の自己犠牲を賛美するロマン主義イデオロギーによって、社会運動とならないよう統制を受けている。それは、自他の境界を確固たる壁へ積み上げていく競争的個人主義社会のなかでは、避難所としての役割をも担っている。しかし恋愛に対するリンドホルムの評価はそれにとどまらない。恋愛は、「さもなければ危険なカリスマ的社会運動に流れこむかもしれない強烈な欲望を、最もうまく最も有効に放出する安全弁」(Lindholm 1990: 186=1992: 351)なのである。したがって、自己実現の理想が突出し、ロマンティックな恋愛関係さえも利害の天秤にかけようとする現代西欧社会の風潮を、彼は危惧する。いずれは「何か別の形態の超個人的関係の中で自己を喪失し、同一化に基づく合一化をはかろうとする圧力」(ibid.: 187-188=1992: 355)が高まるにちがいないからである。

彼の結論は別として、ここで注目したいのは、文化と相対的にカリスマ現象を位置付けた点である。カリスマ的帰依とは、常に反文化的欲望表現であり、統制的文化装置として慣習的に成立している共同体規範の外部に存在する。逆にいえば、共同体規範は、自己犠牲が無限定的にならないよう統制する文化装置としての機能を持つが、常にその外部にカリスマ現象はある、というわけだ。秩序の外部に成立する歯止めの利かないカリスマ的帰依への恐怖（これはリンドホルム自身がもっている）、そして関わりの内部で経験されるエクスタシー（これは帰依者のものだ）、リンドホルムが明らかにしたのは、カリスマ的帰依がもつこうした感情的な意味であった。

ただ以上において明らかなように、リンドホルムは、カリスマ的帰依という語を感情的側面に限定して用いている。ではそうした反分化的＝非日常的なカリスマ的帰依において、いかにして一つの秩序が、またカリスマ的共同体が成立しているといえるのか。それは排除についての合意によってである、と大村英昭は答える。

2. カリスマの排除

大村は、当事者の差異化の産物であるという点において、スティグマ現象とカリスマ現象との構造的対称性を指摘する。

大村によれば、スティグマとは、「われわれの注意を惹き、出会ったものの顔をそむけ

させ、しかもそれさえなければ彼は問題なく通常の社会的交渉で受け容れられるはずの「一つの属性」であり、カリスマとは、「常人には認められない」「人々を魅了し、崇拜させるような能力」（大村 1979：120）である。両者は、共に人々の主観的状况定義から逸脱した属性を表し、ただ逸脱の方向性において異なるのであるが、大村は、そうした方向性自体が、研究者（ウェーバー／ゴフマン）の価値関心に由来するものだと主張する（同所）。つまり彼によれば、両者は、概念上研究者によって引力と斥力という相反する方向を仮託されたものであり、実際には、同型の構造をもつばかりでなく、あるいは一つの対象に同時に存在するともいえる属性なのであって、眺める社会的位置によって、どちらにも見え、また相互に転換するような意味の豊かさをもつものなのである²⁾。

大村によれば、こうしたカリスマ（スティグマ）が両義的であるのは、日常世界の自明性が両義的であることによる。その自明性は、恐ろしく堅固な「もの」のごとく迫ってくることもあれば、たよりない約束事に過ぎないと見えることもある。前者の場合、「遊び」や「フィクション」の世界での空想に同一化することによって、脱出願望を発散し、後者の場合には、「自明の世界」を脅かす存在に対する敵対感情を発散させることによって、その自明性を防御しようとするのであるが、状況のこうした強固さや頼りなさが、ある集団内で許容限度を超えて高まり、危機的な局面を迎えたときには、集会的な強迫観念である「一般化された信念」が生じることになる。このとき「一般化された信念」は、ある行為者に願望実現の全責任を負わせる「願望充足信念」となるか、もしくはある行為者に脅威の全責任を負わせる「敵対信念」となる。前者への脅迫的過同調が「カリスマ崇拜」、後者への過同調が「スケープゴートニング」なのである。

ジラールの供犠論などの発想にも引き付けて理解すれば、彼の指摘において重要なのは、次の二つである。一つは、カリスマとスティグマが、共に排除についての合意によって成立する共同体化の所産であるということ、もう一つは、カリスマとスティグマの相互転換が示すような排除対象の潜在的両義性が、共同体成員自身の両義的感情に関わっているということである。では前者と後者はいかなる関連をもつであろうか。

前者を図式化していえば、Cの排除に関するAとBの合意と同時に、Cはカリスマとして析出され、カリスマ的共同体が成立するということになる。それは、Cに規範的な意味を与えるということであると同時に、Cのもつ意味の豊かさを縮減するということでもある。しかしながら、カリスマ的共同体の場合、リンドホルムのいうような、非日常的な場に淵源をもつCへの無限の合一化＝意味の豊富さの無限定的受容が、カリスマ的关系を規定する重要な要因となっているように思われるからである。したがって、カリスマ的关系における感情的側面と規範的側面との関係を問うために、ここで排除についての合意内容すなわち共同体規範の内側へ踏み込むことが必要となる。

3. カリスマ的正当性と共同体規範

ウェーバーは、カリスマ的関係をまず第一に正当的支配関係として、すなわち命令への服従に関する正当性の問題としてとらえた。しかし「非日常的帰依」(Weber 1972: 124 = 1981: 10)という言葉が表すように、カリスマとの出会いは、他者との非日常的な出会いである。カリスマ的支配の概念は、そうした非日常的経験において正当性規範がいかにして成立するのか、という問題に関わっているのである。

「カリスマとは、まず生来それを所有している物ないしは人に専ら宿り、なにものをもっても手に入れられないことのできない、一つの賜物である。それ以外の場合には、それは何らかの(もちろん非日常的な)手段を通して、物ないし人に人為的に付与されうるし、またそうされねばならない」(Weber 1972: 245-6 = 1976: 4-5)

「〔概念にとっては〕その資質が、カリスマ的被支配者つまり『帰依者』によって、事実上どのように評価されるか、ということだけが問題なのである」(Weber 1972: 140 = 1981: 70)

「カリスマの効力を決定するのは、実証によって(始源的には常に奇跡によって)保証され、啓示への帰依・英雄崇拜・指導者への信頼から生まれるところの、被支配者による自由な称賛である。しかしこの称賛は、(真正カリスマにおいては)、正当性の根拠ではなく、むしろ、それは、召命と実証との力によってこの資質を称賛するよう召し集められた者たちの義務なのである。この『称賛』は、心理学的には、熱狂やあるいは苦悩と希望とから生まれた・敬虔な・全く人格的な帰依である。

いかなる預言者も、自分の資質が、自分についての群衆の意見に依存しているとはみなさなかったし、選ばれた国王やカリスマ的な将軍も誰一人として、反抗者や傍観者を、義務違反者以外のものとして取り扱ったことはない」(ibid. = 1981: 71)

ここには、一つのパラドクスがある。何者にも拘束されず「自由に」Cを称賛するという非日常的感情経験によってはじめて、カリスマはそれとしての効力をもち、カリスマ的支配関係を成立させるのにもかかわらず、当事者A・B・Cは、関係に先立つものとして一つの規範をすでにそこにみており、称賛をそこからの拘束だと感じているのである。いいかえれば、服従の根拠であるところの、Cにおけるカリスマの存在という規範的「事実」は、ウェーバーにとって、概念上カリスマ的関係の中での、まさに「称賛」と「実証」という実践によって生産されるものであるにもかかわらず、当事者には、関係以前から存在している「事実」として、あるいは関係の外部に存在している「事実」としてみえてしまっているのである。そのような「事実」が、当事者A・B・Cにおける合意によって成立すると同時に、Cへの称賛は、すでに服従「義務」として明確にたち現れること

になる。ウェーバーにおける正当性とは、こうした合意された共同体規範のレベルにおける一つの信仰に関わるものである。それは、彼にとって、正当性が物質的／目的合理的／習俗的／情緒的／価値合理的な個人の動機とは「また別の要素」であるからだ³⁾。

非日常的な場に規範的所与をみってしまうという転倒の経験が日常的共同体規範の構造を規定しうる、というこうしたモメントは、何もウェーバーだけのものではないが、ただカリスマ的关系において重要なのは、そうした先行的な規範的所与を、意のままに語り、行為する人そのものにみしてしまうということである。Cへの服従がコード化されている限り、個々の命令内容は、Cによって無限に与えられ、直ちに大文字のテキストとなる。しかもそうしたテキスト化は、伝統や法の制約を受けない「自由な」称賛に基づくものである限り、いいかえれば既成共同体規範外部の非日常的な場にある限り、無限に続けられる。つまり、Cにおけるカリスマの存在という「事実」が共同体規範として成立している限り、それはCの無限のテキスト化と表裏一体の構造となって、対外的コンフリクトを招き、あるいはカリスマ的共同体の自己変容をもたらすのである。したがって、リンドホルムが危惧するカリスマへの無限の合一化は、単に非日常的な場における個人の感情表出に限られる問題ではない。そこに新たに成立するカリスマ的共同体規範自体がそれを加速するイデオロギー装置として機能しているのであり、その意味で、カリスマへの無限の合一化という問題は、共同体レベルにも関わってくるのである。

以上三つの理論を参照してきたが、そこで学んだことを簡単にまとめておこう。リンドホルムによれば、カリスマ的関係の感情的側面が既成の共同体規範からの無根拠性・反文化性・非日常性をもつところに、その概念の指示する問題性がある。大村によれば、カリスマ的関係には、一つのパラドクスがある。排除対象は、排除についての合意と共同体規範化によって、はじめて明確に立ち現れるものでありながら、依然として豊かな意味をもっている。最後にウェーバーによれば、こうしたパラドクスが起こるのは、カリスマ的他者との出会いの中に、先行的事実としての規範的所与をみってしまうという非日常的経験が、カリスマ的共同体における規範の内容を構成しているからだということになる。それは、同時にCをテキスト化する構造でもあり、それによって共同体のあり方が規定されてしまうのである。

4. 非対称的關係の転倒

こうした視野に立てば、カリスマ的関係とは、隠蔽と二重の転倒とを伴った一つの非対称的關係であるといってみることができる。カリスマをあたかも関係に先行して存在する事実としてみってしまうということは、関係の所産である規範的「事実」を、関係を規定す

る「原因」として表象することであるから、一つの時間的転倒である。しかし同時にそれは、支配／服従關係が可能であるための本来の成立条件または根拠であるところの、「自由に」意味を与える被支配者自身の姿を隠蔽することでもある。そしてさらにそれは、關係の成立条件または存在根拠を、被支配者自身ではなく、カリスマ的支配者に投射してみることもであるから、本来の非対称的關係の転倒である。つまりここでは、既成の共同体規範の外部にあるために、それによって根拠づけることのできない、隠蔽された称賛の「自由」性と、カリスマの先行性という明確なカリスマ的共同体規範による、称賛の被拘束性とが、平行して存在し、あるいは不可分に結び付いているのである。

こう読むと、確かにカリスマの変形についての記述が読み取りやすくなる。いわゆるカリスマの変形（日常化・事象化・反權威主義的解釈がえ）は、隠蔽されている称賛の無根拠性が露呈せざるを得ないときに起こりうる。ウェーバーが、後継者問題を特にその一例として挙げるのは、そのためである。後継者が必要であるとは、すでにカリスマ的關係の存続への利害関心があるにもかかわらず、カリスマへの称賛を正当なものとして規定していた根拠が消滅してしまった事態のことだからである。このときカリスマ的支配者・帰依者の外部に正当性根拠をみることによって、もう一度称賛の無根拠性を隠蔽するのが、カリスマの日常化であり、逆に帰依者自身の自由な称賛を顕在化させ、それに正当性根拠を与えるのが、カリスマの反權威主義的解釈がえなのである⁴⁾。

しかしここに一つの疑問が残る。カリスマ的共同体の内部において、Cを正当なカリスマとして既にみてしまっているとするならば、カリスマ的共同体の内部において、成員の称賛のみがカリスマ的關係の妥当性根拠であるということではできないのではないだろうか。それはあくまでカリスマ的共同体の外部に立ったときの視野に属するものなのではないだろうか。

例えば、カリスマ的共同体の内部からみれば、隠蔽は外部にも存在する、といいうる。カリスマ的共同体の内部では、カリスマの先行的存在は、中心的事実そのものなのであり、内部者は、外部者が抱くカリスマ的關係の表象において、そうした中心的事実が隠蔽されていると感じるからである。したがって、カリスマ的共同体内部において表象されるカリスマ的關係と、外部において表象されるカリスマ的關係とは、相手の立場からみれば、相互に転倒しているようにみえる。内部から外部者の表象をみれば、そこにはカリスマの中心性が隠蔽されているようにみえるし、外部から内部者表象を眺めれば、そこには、帰依者側の無根拠的称賛の中心性が隠蔽されているようにみえる。

したがってここでの問題は、カリスマ的共同体の外部からの視野を本とするか、内部からの視野を末とするか、ということではない。それは、稿を改めるべきより広い問題であるし、調停不可能な神々の闘争ともみえる。ここで主張したいことはそうではなく、カリ

スマ的共同体自身がその成立と同時に設定する内部／外部の差異に基づいて、両者の相対的關係において、カリスマ的関係を定義することができるということなのである。すなわちカリスマ的関係とは、外部からはその存在基盤とみえる非対称的關係が、内部において転倒して表象され、共同体規範として成立している関係のことである。

5. 結論と展望

本稿でいうカリスマ的関係とは、カリスマ的人物と帰依者との二者関係のことである。しかしここで考察しようとしたのは、客観的な視野において、等質な二者がもつ交換関係としてのそれではなく、むしろカリスマとの出会いにおいて与えられる意味連関である。このときカリスマ的関係のパラドクスは、出会いの対象としてのカリスマのパラドクスとして現れる。まず第一に、非日常的な出会いの場においてあったのは、カリスマ的他者がもつ意味の豊富さである。カリスマの両義性とは、それを二極化した表現に過ぎない。しかもそうした意味は、豊かなまま与えられるのではなく、内在的経験として、つまり与えられるものはそれとして受け取らざるを得ないという所与性として現れる。カリスマと出会う者は、経験と意味の境界に立つのであるが、そこでカリスマ的他者の同定は、規範的な意味合いをもつことになる。カリスマのパラドクスとは、既成の共同体規範の外部における、非日常的な他者との出会いが、当事者において、その場を越えた規範的所与としてみられてしまうことをいうのである。しかもそうした経験は、形式的に共有されるべき対象としてコード化されるときに明確に立ち現れてくる。

このように規範の意味が対象化され、形式的に共有されるべきものとして、他の対象と関連づけられるような指示を受けているとき、本稿においてこれを共同体規範と呼んでいる。共同体とは、つまり規範の共有を規範とする交換関係のことである。この共同体規範は、言説レベルにおいては、差し当たりある表象や行動を根拠のあるものとして自他に認めさせ、その場を収めてしまう「説得と納得の言説」（松田 1989：104）を通して、外部者に立ち現れてくる。その「言説」が、共有されるべき規範の内容を参照すると同時に、その規範自体を共有対象として指示するような規範をも参照している様子が透けてみえるからである。松田のいうように「説得と納得の言説」が、便宜的にはあれ使われている場においては、背後にこうした共同体規範が成立しているとみることができる。

こうした共同体規範は、ここで二つの機能をもつ。一つは、非日常的経験がもつ意味の豊かさを縮減し、それを明確なものとして現前させることである。カリスマ的関係概念の独自性は、ここに関わる。カリスマ的共同体規範は、語り、行為する人それ自身を規範的所与として特定化するために、豊かな意味をもつ他者との非日常的な出会いの場を維持す

ることになる。そこに現れるのは、その場その場の新しい言葉と行為、そしてその無限のテキスト化の過程である。そしてそれがいずれは、カリスマ的共同体それ自身の変容を来してしまうのである。

二つには、規範の共有如何によって、内部と外部を差異化するということである。このことが示唆するのは、共同体の成員による自己表象と外部者が表象する「客観的」関係形態とのずれであり、ひいては、まさしく彼にカリスマをみた者とみななかった者との断絶及び闘争である。つまり共同体は、外部からみると常に仮構として現れるのである。むしろ抽象的にとらえれば、実践によって不断に規範を再構築していく社会関係と、それに規範の共有という規範を上乗せする共同体関係（または閉じた社会システム）の姿がみえる。そうした共同体規範を内部者が仮構している様子が透けて見えるとき、それを異様なものとしてみてしまうような経験を我々はしている。しかし共同体規範の成立が、非日常的経験の共有を契機とする限り、共同体は仮構され続けるはずである。

カリスマ的共同体は、未分化に循環する二つのベクトルから成る。カリスマを排除することによって、それを意味化し、あるいは構造化しようとする共同体規範に対し、当のカリスマは、語りや行為を通して、常に豊かな意味を与え、あるいは非意味化・非構造化する力として現れる。それを共同体規範は再び構造化しようとする。つまり非日常的経験における意味の豊かさとそれを縮減するはずの共同体規範とが相互浸透している、という意味において、あるいは聖／俗が交差し重なり合っている、という意味において、カリスマ的共同体は独自であるといえるのである。そしてそれは、カリスマを先行的「事実」としてみてしまった、という経験に基づいている。カリスマを先行的事実としてみるということは、カリスマを信じるということと同義である。その意味で、カリスマ的共同体は、Cに内に根拠の所在をみる信仰それ自体と、Cへの無限の服従とを規範とする信仰の共同体として成立するのである。

ではカリスマ的關係の独自性を構成する経験とは、どれほど普遍的なものだろうか。いかえれば、人の中に規範的所与をみるという経験に、それ以前の経験が、すなわち文化がどれほど関わっているのだろうか。もちろんこの経験と文化の境界、あるいは非日常性と文化の境界という問題は、本稿の範囲を遙かに超える。それは、あるいは概念上の問題だけではないかもしれない。むしろフィールドにおいて、その二つの領域を往復しながら対岸を眺めること、あるいはそれらにまたがって立ちながら、境界そのものをみるということも必要であるように思う。

注

- 1) ゾームからの概念受容及びウェーバーにおける概念の発展過程については、佐野誠 1985/86

が詳細に検討している。

- 2) カリスマとスティグマの相互転換の可能性については、リップが自己スティグマ化 (self-stigmatization) という語で、より動的に説明している (lipp 1977)。
- 3) ウェーバーにおける正当性とは、個々の行為における動機の表現ではなく、むしろ間主観的に存在する、ある共有されるべき意味である。「ヘルとの関わりが、習俗や利害状況を動機としている場合にも、あるいは純情緒的なし純価値合理的な動機に基づいている場合にも、これらの動機は、支配の信頼し得る基礎を表すものではない。これらの動機に、通常は、もう一つの要素、すなわち正当性信仰が付け加わっている」(Weber 1972: 122=1981: 4)。
- 4) ウェーバーにおけるカリスマの日常化とは、支配者の存在根拠及び正当性根拠が、次のような変形を被ることをいう。1. 伝統化：慣習化した選抜規則による正当化。2. 合法化：正当な選抜技術による正当化。3. カリスマの人物またはカリスマの行政幹部の指名と、帰依者の承認。4. 世襲カリスマ：相続順位に関する伝統化と合法化。5. 事象化 (官職カリスマ)：資質の正当な取得手続きによる正当化。これらに共通することは、正当性根拠がカリスマ的支配者及び帰依者の外部に存在していることである。さらに3. 以外に関しては、帰依者の承認も不必要である。カリスマの反権威主義的解釈がえについて、ウェーバーは次のようにいう。「団体関係が合理化されるにつれて、次の事態が容易に起こるようになる。この承認〔カリスマ的な権威に対する帰依者の承認〕は、正当性の結果ではなくて、正当性の根拠と見なされ (民主制的正当性)、後継者指定は (行われる場合)、行政幹部によるものは『予備選挙』、前任者によるものは『提案』とみなされ、ゲマインデ自身による承認は『選挙』とみなされる事態である」(Weber 1972: 156=1981: 138)。『人民投票的民主制』……は、その真正な意味からすれば、被支配者の意志から引き出され、この意志によってのみ存続する正当性、という形式の下に隠された一種のカリスマ的支配である」(ibid.=1981: 140)。このように、カリスマの側にある正当な顕在的規範と、帰依者の側の正当でない潜在的規範とのあいまいな関係を対象化し「合理化」することによって、カリスマ的關係は安定性を獲得する。

引用文献

- Friedrich, C. J.,
 1961 "Political leadership and the problem of charismatic power", *Journal of Politics*, 23: 3-24.
- Glassman, R. M., Swatos, W. H. Jr. (eds),
 1986 *Charisma, History and Social Structure*, New York.
- Lindholm, Ch.
 1990 *Charisma*, Oxford and Cambridge.
 =1992 『カリスマ 出会いのエロティシズム』森下伸也訳、新曜社。
- Lipp, W.
 1977 "Charisma-Social Deviation, Leadership and Cultural Change", *The Annual Review of the Social Sciences of Religion*, 1: 59-76.
- 松田素二
 1989 「必然から便宜へ」鳥越皓之編『環境問題の社会理論』お茶の水書房。
- 大村英昭
 1979 「スティグマとカリスマ」『現代社会学2』講談社。
- 佐野 誠
 1985/86 「カリスマ法制化への道程」(X)『法学論叢』118-2/119-3。
- Weber, M.
 1972 *Wirtschaft und Gesellschaft*, 5. revidierte Aufl., Tübingen: Mohr.

=1972 『宗教社会学』武藤一雄他訳、創文社。

=1981 『支配の諸類型』世良晃志郎訳、創文社。

Wolpe, H.

1968 "A critical analysis of some aspects of charisma", *Sociological Review*, 16: 305-318.

(みずがき げんたろう・博士課程)

On the Conception of the Reversed Asymmetrical Charismatic Relationship

Gentaro MIZUGAKI

The term charisma generally refers to the power of an extraordinarily gifted individual to attract followers. However, it has not been clearly defined in technical terms.

The uniqueness of charismatic community can be understood by reference to the mechanism whereby charismatic relations are produced and reproduced. Charismatic community undergoes self-transformation or self-destruction through infinite textualization of the charismatic person's words and actions.

An extraordinary experience of commitment to the other can bear an abundance of meanings. However if a shared meaning of the experience becomes collectively coded and routinised, it forms the basis for defining a community, and at the same time, provides a normative frame within which the collective experience is predefined.

The community norm has two functions. First, it circumscribes and structures the meanings derived from the extraordinary experiences with the charismatic figure. Second, it defines the boundary between inner community and outer non-community.

In a charismatic community, the charismatic person is the source of the community norm. Therefore it preserves the place for the extraordinary encounter with the charisma. In short there is a dynamic interaction between charismatic authority and community norm; through arbitrary narrative and action, the charismatic figure simultaneously generates new meanings and destructures prior meanings. The community norm in turn strives to impose limits and structure on this process.

Second, participation in the community requires acceptance of the charismatic experience as an aprior reality. For those who do not share in the experience of community, the charismatic relationship appears to be based on definition by the followers. For those who share the norm, outsiders seem to be blind to the explicit fact of the charisma. Therefore the insiders's self-representation is an inverse of the

outsider's representation of the insider.

The outsider perceives the charismatic relationship as a reversed, asymmetrical social relation which conceals collective representation of a certain person as a source of the community norm. For the outsider, the charismatic relationship is derived from collective circumscription of charisma, which is represented by the charismatic figure.

Family Images in Modern Japan: Two Types from the Text-books on Morals

Hideki NAKAZATO

This paper aims to examine how families, particularly in terms of the relationships between parents and young children, are described in text-books on morals used in Japanese primary schools in the years between 1904-1940. These text-books may be considered as an appropriate source of images of the family for school children in those days.

The text-books described two types of families. The first type is where both parents and children were engaged in labor as contributors to the household economy. The second type is where children were taken care of and educated by their parents and enjoyed talking with them during meals. The latter type echoes descriptions of the modern family in social history research from European countries.

We cannot conclude that these two contradictory images of the Japanese family were confused in the text-books. When the 'pre-modern' type is described, leading characters are famous persons from before the Meiji era. By contrast, the leading characters in accounts of families of the 'modern' type, are fictional. However, they are contemporary with the pupils' social reality.

We therefore conclude that in the text-book model of the 'ordinary' Japanese family, domestic life was centred on mutual enjoyment, and that parents had an affectionate and nurturing attitude toward their children.